

文献にみる長崎の江戸時代初期以前の牛肉食について

誌名	畜産の研究 = Animal-husbandry
ISSN	00093874
著者	松尾, 雄二
巻/号	67巻2号
掲載ページ	p. 281-284
発行年月	2013年2月

文献にみる長崎の江戸時代初期以前の牛肉食について

松尾雄二*

長崎県農林技術開発センターでは、長崎県内における牛肉を食べた（以下、「牛肉食」という。）記録を研究するため、イエズス会文書関係等（日本語訳のもので出版されたもの）の文献を中心に調査を実施してきたが、概要は以下のとおりである。なお、『文献名（翻訳者）』、「（抜粋引用、引用中の（ ）は注釈等）」及び漢数字年月日は和暦、洋数字は西洋暦とする。

1 はじめに

齋部広成の『古語拾遺』に、大地主神が田人に牛肉を食べさせたり、『日本書紀』神武天皇の戊午年八月乙未の記事に神武天皇が「牛酒（牛肉と酒の意味）」でもてなされた記事があり、古くから牛肉食が行われていたことが示唆される。しかしながら、『日本書紀』天武天皇の四年四月庚寅の詔で、「牛・馬・犬・猿・鶏の糞を食うこと莫れ」とあり、肉食禁断令以後、江戸時代に将軍などへ献上された薬食いとしての牛肉以外は幕末まで牛肉食はなかったとされる。そこで、江戸時代初期以前の長崎県内を中心とした牛肉食を述べる。

2 キリスト教布教の頃

（室町時代から南蛮人追放まで）

『1549年11月5日付、鹿児島発、パードレ・メストレー、フランシスコ・ザビエルから、ゴアのサンパウロのコレジヨのイルマン等に贈りし書簡（村上訳）』には、「1549年8月（被昇天の）聖母の祝日に、サンタ・フェーのパウロの故国なる鹿児島に着きたり。（中略）デウスが我等を当地方に導きて大なる恵みを垂れ給ひしは、当地方は物資少く、我等の肉体に過剰の物を与へんと欲するも、土地これを許さず。彼等は家畜を殺して食ふことなく、時々魚を食す。米および麦あれども少量にして、野菜は多く、果物は少しく産す。」とあり、この頃までは牛肉食はなかったと推量される。

そのような中、パードレ（司祭）が牛肉を日本人にふるまう記事が出てくる。

『1557年10月28日付、平戸発、パードレ、ガスパル・ビレラのインド及びヨーロッパのイエズス会のパードレ及びイルマン等へ贈りし書簡（村上訳）』には、「当日は大なる祝日なりしがゆえに、約四百人のキリシタン一同を食事に招きたり。ただし多数のキリシタンはすでに去り、山口のキリシタン等は来らざる者多かりしなり。この食事のため我等は牝牛一頭を買ひ、その肉とともに煮たる米を彼等に饗せしが、皆大なる満足をもってこれを食したり。」とあり、山口において、日本人に牛肉料理を食べさせた記録がある。「牛肉とともに煮たる米」はアロス・コム・ワカと多くの書物で推定されている。

長崎県内は多くの半島と島からなり、平戸、横瀬浦、福田、長崎、口之津、五島などに貿易港が開かれ、この地域は下地方と呼ばれ、早くからイエズス会のキリスト教布教の中心地となっていた。

『1560年12月1日付、ゴア発、イルマン、ゴンサロ・フェルナンデズのコインブラへのイエズス会のコレジヨの某イルマンに贈りし書簡（村上訳）』によれば、「この地においては、……この国民は色白く見識あり、甚だ礼儀正しく、大いに衣服に意を用ふ。食するに棒（箸）を用ひ、美食なれどもその量少し。（中略）彼等は何にても食すれども、坊主のみは牛肉を食はず。」とあり、坊主を除き、そこにいる日本人は牛肉や豚肉を食べたとされる。「この地」は日本のどこか記載してないが、いろいろな文脈、状況証拠などから平戸であると考えられる。

平戸では、領主が海外貿易の利のみを求め、イエズス会を迫害したため、彼らはドン・バルトロメウ大村純忠の大村領横瀬浦、福田、長崎の港に転々と移転していく。その間、大村純忠は長崎をイエズス会に1580年に寄進する。

天正十五（1587）年六月、九州征伐後、「牛馬ヲ売買ころし食事、是又可為曲事。」と命令した翌日、博多において、関白秀吉はイエズス会副管区長ガス

*長崎県農林技術開発センター 畜産研究部門研究調整室

(Yuji Matsuo)

パル・コエリヨ及びルイス・フロイスに三カ条を示して難詰したとある。その一つが牛肉食に関することであった。

『1588年2月20日付、有馬発、パードレ、ルイス・フロイスからイエズス会総長あて書簡(1587年日本年報)(松田訳)』には「牛馬は人間に仕え、有益なる動物であるに、何故にこれを食ふ如き道理に背いたことをなすか。」と詰問し、これに対し、ルイス・フロイスの『日本史(松田・川崎訳)』によれば、イエズス会副管区長らは「第二(牛肉食)の質問であるが、「我らの故国においては馬肉とか、日本人が食べる他の動物すなわち大猿、猫、鼠、狐その他これらに類する動物を食べる習慣はない。だが、仰せのとおり牛肉を食べることは確かなことである。これは世界で最も古い習慣だからで、ここでは国家に何ら損害を及ぼすことも、農業に害を与えることもなく、この慣習が保たれている、と言うのは、その目的のために大量の家畜が飼育されているからである。パードレ達はポルトガル船が入る湊にいる時には、ポルトガル人と一緒であったから、時として牛肉を食べることはあったが、五畿内その他の遠隔の地に散在しているパードレ達はすでに日本人の常食に馴染んでおります。日本に来るポルトガル人の商人達には、この件で我らパードレから注意喚起いたしましょう。ただし、日本人が彼らに牛肉を売りに来る以上、彼らが牛肉を利用するかどうかは保証の限りではありません。」とあり、日本人が牛肉を売っている実態が明らかにされる。再び、牛肉食を非難した太閤秀吉に関することである。

朝鮮出兵(1593年頃)の時、名護屋(佐賀県唐津市)ではポルトガルの服装が大流行し、長崎の仕立屋は休む暇もないほどであったと述べる。ルイス・フロイスの『日本史(松田・川崎訳)』には「私たち(ヨーロッパ人)の食物も彼ら(日本人)の間ではとても望まれております。とりわけ、これまで日本人が穢れるとして非常に嫌悪していました卵や牛肉料理がそうなのです。太閤様までがそれらの食物をととても好んでいます。」とあり、一方では牛肉食を難詰しながら、牛肉が秀吉の好物の一つであったことが報告されている。秀吉が亡くなり、豊臣と徳川勢が勢力争いをしている時期のことである。ちょうど、この頃の報告と考えられるものがある。

パードレ、ジョアン・ロドリゲスの『日本教会

史(土井訳)』には日本の牛の用途や牛肉食について記載している。

「家畜では、ただ犬が狩猟のために飼われ、鶏や鴨や家鴨を飼うのはただの娯楽のためであって食用にするためではない。なぜなら、(日本)王国中で、豚、牛のような家畜は不浄のものと考えられ、家畜一般の用途はその肉を食うのではないからである。もっとも、ナウ(船)や商船で日本に行くポルトガル人との商取引でポルトガル人に売るために、これらの家畜を(日本人が)飼っている。また、すでにこの地の多くの者がこれらのものを食っているのであって、ポルトガル人と取引するために諸地方から集まって来る商人や、一部の領主その他の者が、薬だとか珍しい物だとかいう口実のもとに食っている。」とされる。そして、ここでは領主だけではなく、ポルトガル人とつき合った日本人、特に商人たちは牛肉を食べていたというのである。

アビラ・ヒロンの『日本王国記(佐久間訳)』には「国内いたるところにたくさんの鶏がいるが、しかし質の良いものは支那から来たもので、それらは私の見た内でも最上のものだ。(中略)肉のうまい鹿と猪、非常に大きい野兎と、家兎、その他の獵獣、(中略)、美味な肉のいろんな種類の家鴨、通常の鳩、(中略)、その他様々な種類がいる。(中略)たくさんの牛がいるが、それを土地の耕作と荷運びに使用している。女たちは馴らした牡牛に乗って行く。牛に話すことを教えるわけではないが、(牛が)よく理解するように仕込む。

彼らはこの家畜を前には食わなかったもので、私が(15)94年にこの王国に来たときは、一頭の牛 vacca が4、5レアルの値であって、骨を除いた牛肉35カテ(斤)を1マスで売っていたが、それは40リブラあまりである。今日では1マスで厳格に目方をかけて4カテもくれない。つまり現在ではここの住民がみな牛を食うからであり、また以前はこの都市(長崎)には三千の住民だったのに、今では二万五千(人)以上いるからである。」と記載される。

以前は長崎では牛肉を食わなかったが、「今日(1600年頃)」では、値段も8倍以上するようになっていてと彼は嘆いている。そして、その理由に長崎の住民皆が牛肉を食い、さらに牛肉を食う長崎の住民そのものも増えている、と言っている。フロイスの『日本史』やジョアン・ロドリゲスの『日本教会

史』では武将や商人達が牛肉を食べたとされるが、アピラ・ヒロンは長崎の住民皆が牛肉を食べるといふ。

長崎で大いに活躍したイエズス会は日本語を多年研究し、日本語をポルトガル語に翻訳した『日葡辞書（土井ら訳）』を1603～4年頃に完成させている。下地方の方言や耳で聞いた日本の言葉をポルトガル式ローマ字で表記したもので、その当時の発音や話し言葉までもが収録され、当時のことを知る上で貴重なものとなっている。牛肉関連は以下のとおりである。

Guiunicu	【牛肉】	Vxino nicu（牛の肉）牝牛や牝牛の肉
Nicu	【肉】	Xiximura（ししむら）
Xixi	【宍】	肉
Xiximura	【宍むら】	肉<肉のかたまり>

などとあり、Nicujiqi【肉食】、Azare, uru, eta【餽れ、る、れた】、Sagari, u, atta【下がり、る、った】などの牛肉関連の言葉がある。

なお、同時代の牛肉を意味する「わか」については、古賀十二郎の『外来語集覧』には、ポルトガル語 vaca, vacca（スペイン語 vaca）とあり、①牝牛、②牛肉の意味で鎖国時代を通じて使われたとある。これらの関連のことから牛肉食の可能性が示唆される。

慶長十七（1612）年の徳川幕府の禁教令が出て、牛肉食が禁止されている。「南蛮記利支旦之法天下ニ停止スベキ旨（中略）牛を殺す事御禁制也。自然殺するものにハ一切不可売事」とあり、江戸幕府の天領に行われたもので、教会の破壊とキリスト教布教の禁止が命令され、禁教令が布告された。

平戸は、「彼等は何にても食すれども、坊主のみは牛肉を食はず。」と報告のあった地であり、この頃はポルトガル人らは平戸から長崎に移り、平戸に来たイギリスとオランダは平戸藩主松浦法印隆信に迎えられ、それぞれが平戸の地に商館を構え、商いを競っている中で、イギリス人ジョン・セーリスの『日本渡航記（村川・尾崎訳）』には、セーリスが江戸（駿河）参府した時の大坂での日記である。「（1613年）8月28日

この国全般をつうじて用いられる食物は、たくさんの種類の米である。それには予（セーリス）らの小麦

や穀物のように品等があつて、そのもつとも白いのが最上としてあり、それを彼らはパンの代わりに用いる。つぎに生または塩漬の魚、酢漬の菜葉、豆類、塩漬または酢漬の大根その他の根、野禽、家鴨、真鴨、小鴨、鶯鳥、雉、鷓鴣、鶉、その他たくさんの種類があつて、彼らはそれに粉（糠漬か）をかけ塩漬する。鶏はたくさんある。鹿も同様で、赤いのと淡黄色との両方がある。野猪や、野兎や、山羊や、牝牛などもある。チーズ（豆腐か）はたくさんある。バターは一つもつくらない。また牛乳も飲まない。

馴れた豚や子豚を、彼らは非常に豊富にもっている。小麦は赤くて、われわれのと少しも劣らないのがある。彼らは予等がこちらでやるように牛と馬で鋤犁する。予らのかの地滞在のとき予らは最上の牝鶏と雉とを1羽3ペンスで買った。はなはだ肥えて大きな小豚が1頭12ペンス、肥えた大豚が5シリング、予等のウェールズ産のラントのようなよい牛肉が1ポンド16シリング、山羊が同3シリング、米が半ペニイである。」と記載される。

この時代に、日本の彼らは慣れた豚や子豚を非常に豊富に持っているといふ。日本でこれらの家畜の豊富な「かの地」はどこか、ということになる。

9月29日付の日記に、「この地（浦賀）は平戸のように食料品や生肉が豊富ではない。」とされ、「かの地」は平戸であるということが推定される。当時の平戸はいろいろな家畜が供給できたとされる。

また、当然、平戸の日本人らに牛肉料理を食べさせた記録もある。これはセーリスが江戸への参府のために、平戸イギリス商館の留守番をしていた『リチャード・コックスの日記（村川・尾崎訳）』である。

「（1613年）10月10日（平戸にて）

老王（前領主松浦法印鎮信）は葱と蕪菁とを入れて煮たイギリス牛肉の一片と、豚肉の一片とが欲しいから、明日送ってもらいたいと望まれる。

10月11日

前記の通り調理した牛肉及び豚肉に、葡萄酒一壺と白パン六塊を添え、通訳ミグエルに持たせて老王のもとに送った。彼は大いに喜んで、それを受け取り、孫の若王（宗陽隆信）、弟の（松浦豊後守）信実、親類の主馬殿を招いていっしょにこれを食われた。」とあり、セーリスが江戸参府から平戸に帰って来てからのことである。

「11月11日

予は老王法印に彼の家で会ったが、胡椒をかけたイギリスの牛肉二片と、予らの料理人の手で蕪大根、及び葱と煮た豚肉二片を望まれたので、その通りつくらせて彼に贈った。」と記載してある。

平戸の殿様松浦法印鎮信は短い期間に何度も所望するように、牛肉や豚肉が好きなようである。坊主以外には皆が牛肉を食うこの地では殿様も例外ではなかったらしい。

再び、イエズス会側の動きである。

『1615年3月25日付、長崎発、パードレ、カルロ・スピノラのイエズス会総会長あての書簡(高瀬訳)』には、「供応についても同じことを言いたい。(中略)これに対してわれわれは、西洋料理や日本料理のごちそうを品数多くとりそろえてもてなす。このためにわれわれは評判を落とし、これがわれわれの日常の食生活だと思われてしまう。(中略)これまで、言われてきたことだが、イエズス会のカーザに行つて(日本人が)牛肉を腹一杯食べたとか、西洋料理を食べに行つたと言われたり、その目的で友達を誘つて来たりすることは、われわれにとって名誉なことではない。」とあり、牛肉を含めた日本人への供応が行われていたようである。そして、イエズス会及びポルトガルなどの南蛮人は最初の頃の、ザビエルの精神の気高さと清貧さを忘れ、イエズス会内部の混乱、ポルトガル人とスペイン人との争い、そして腐敗、ついには墮落し、カトリックの他の会派と相争い、ついには日本の中でキリスト教と南蛮人は没落していくのである。

3 おわりに

長崎の牛肉食をイエズス会及びイギリス側の文献(邦訳されたもの)を中心にまとめてみた。その結果、日本人のキリスト教徒、領主、貿易商人などは牛肉を食べていたと考えられる。

なお、『肥前風土記』の松浦郡の条には、「(値嘉郷)彼の白水郎は馬牛に富めり」とあり、五島に古代より牛が多くいたことが知られ、『延喜式』の諸国馬牛牧の肥前国の項には庇羅馬牧(平戸市)、生属馬牧(平戸市生月)、櫛野牧(五島か)、早崎牛牧(南島原市)が記載されている。また、鎌倉期の『国牛十図』及び『駿牛絵詞』には筑紫牛(老岐嶋牛)及び御厨牛(肥前国宇野御厨の貢牛)が紹介され、長崎は古代より牛の産地として名高い。

引用・参考文献

- 日本書紀、坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注、岩波書店
 風土記(日本古典文学大系)、秋本吉郎校注、岩波書店
 延喜式(国史大系)、吉川弘文館
 古語拾遺、斎部広成撰、西宮一民校注、岩波書店
 イエズス会士日本通信 上・下(新異国叢書)、村上直次郎訳、雄松堂出版
 イエズス会と日本(大航海時代叢書)、高瀬弘一郎訳注、岩波書店
 十六・七世紀イエズス会日本報告集、松田毅一監訳、同朋舎出版
 完訳フロイス 日本史1~12、ルイス・フロイス、松田毅一・川崎桃太訳、中央公論社
 邦訳日葡辞書、土井忠生・森田武・長南実訳、岩波書店
 日本教会史、ジョアン・ロドリゲス(大航海時代叢書)、土井忠生訳、岩波書店
 日本王国記、アビラ・ヒロン・日欧文化比較、ルイス・フロイス(大航海時代叢書)、佐久間正、会田由、岩生成一訳、岩波書店
 セーリス日本渡航記、ヴィルマン日本滞在記(新異国叢書)、村川堅固、尾崎義訳、雄松堂出版
 群書類従、塙保己一、続群書類従完成会、平文社
 外来語集覧、古賀十二郎、長崎純心大学比較文化研究所、長崎文献社